

是彼會員

「史実資料蒐集」の経緯

中村 肇 (会員)

表題に着手した事由は生涯体験の「証」を望んだからである。

小生は昭和12年満洲国鞍山市で誕生、最後の引揚船大安丸(※1)で同22年10月葫蘆島出港、佐世保港に帰還した。父は昭和8年まで八幡製鉄に在籍、家族共々大連航路で渡満し昭和製鋼所に移籍した。

父は終戦後2年間強制抑留されこの1年半余り小生は日籍技術員工子弟鞍山国民学校(※2)に通い小川七次校長、葛西一郎両先生から学び引揚時には通信簿を頂いた。児童期の生き様は多くの引揚者同様楽しかったこと、苦しかったことを交え児童なりに体験、刻み込まれた。

また引揚後内地の状況は他の引揚者同様生活面でどん底を味わい貧困学生時代を過ごし卒業

直後に大型船舶海技士免状を取得、乗船勤務についた。

機会を得て外資系石油会社に転職、海外諸国出張、多くの体験も重ねた。退職まで35年間の勤務も無事に終え、己の生涯を記録に残したいと再度芽生えたが挫折した。6年余りは幾つかのボランティア活動を続けた。

が矢張り孫たちに己の生き様を伝承したいとの拘りから抜け切れなかった。記憶の中には父の日記、在満復員した叔父の体験談、複数の回顧録書籍内容等にズレや違いがあることに疑問を持った。それには精神的、肉体的等からくる次元差、記憶差が繰るのではないかと考え史実を知りたい意欲にわいた。

姉から「満洲冠」が付いた動植物名を探索したらと助言があ

り「マンシュウ」冠むりの付いた動植物名、地名や船舶名等105個余リスト(※3)の名称及び学名を探索した。これをヒ

ントとし「史実」の探索を決意し己にとっては生涯終末迄の生業になるはずと確信した。

主な探索先は公文書館、外務省外交資料館、防衛庁防衛研究所、当時の新聞記事等を体験したことに基づき「キーワード」を設定、探索続けて20年以上が経過した。

探索総件数15万件(※4)強、満洲関連が5万5000件余りになったこれら蒐集資料を死蔵してはならぬと考え幾つかの大学研究者、某学会の会長、法人/文化財記念館2か所等に提供してきたが、闇雲な提供は避けた。著作権不理解、誤ったキーワード使用、資料コレクター等は対象外とし

一線を引いた。某大学教授はテーマに関する論文を3年程費やし完成、博士号を取得された。こちらには1000件余の資料を提供した。歴史に関わる論文を読み小生も深く理解でき且つ達成感も味わった。

己の生涯の体験で公文書等から得た資料が「証」となり「史実資料蒐集」目的が達成したことに安堵している昨今である。

※1…「終連丙級3/4防衛研修所戦史室原本資料」

※2…通称「鳩小屋学校」

※3…「満洲鞍山中学校同窓会誌『天馬』」掲載済み。

※4…平成29年8月末現在



第12回東京オリンピックポスター(昭和15年開催返上)大阪毎日新聞